

8311 日本人は昔から、自らについて・・・

日本人は昔から、自らについて多くを語るのをいさぎよしとしない気風が強い。

一方、欧米を始め世界多くの国では、自己表現をきちっと、魅力的に出来ることが、紳士の必要条件とされている。

国家の場合にもこれが当てはまる。明治以来日本政府は「外交は耳だけ動かせばよろしい。口を動かす必要はない」(小村寿太郎)といったサムライ的身構え方で外国と接してきた。

朝日新聞：社説

#### [許容訳例]

It is an ancient characteristic of the Japanese that they disdain to talk too much about themselves. On the other hand, in a lot of the countries of the world including Europe and America, to be able to express himself neatly and attractively is an essential qualification for the cultivated man. This also holds true of national affairs. Ever since the Meiji era, the Japanese government has dealt with other countries with the samurai-like attitude of Komura Jutaro, who said, "In diplomacy we only need to use our ears. It is not necessary to open our mouths."

#### [翻訳例]

Since ancient times the Japanese have tended to feel it demeaning to talk too much about themselves. On the other hand, in the West and many other parts of the world to be able to present one's ideas succinctly and attractively is seen as an essential qualification for any cultivated person. The same differences apply in the case of nations too. Ever since the Meiji Restorations, the Japanese government, in dealing with other countries, has applied the samurai-style approach of Komura Jutaro, who said, "In diplomacy, it is enough to use our ears; to use our tongues is unnecessary."

■日本人は昔から、自らについて多くを語るのをいさぎよしとしない気風が強い。(8311)

★「日本人」は the Japanese です。

★「昔から・・・だ」は since ancient[longstanding] times と現在完了を組み合われます。

★「自らについて多くを語る」は talk too much about themselves でしょう。なお, themselves はこの場合 oneself でも構いません。

★「(日本人は) いさぎよしとしない」は、辞書には disdain (to-Inf.; -ing) が出ていますが、この言葉はその人のプライドを非常に強調したい場合に使うものです。たとえば、「そんなやましいことをするのは自分のプライドがとても許さない」(be too proud to do something) というような時に使う言葉です。したがって、ここで使うと、場合によっては何か日本人

がよその国を馬鹿にしているようなニュアンスが入りかねません。日本語の「いさぎよしとしない」には必ずしもそこまでの意味は入っていないと思います。そこまでのニュアンスがほとんど入っていないで使える言葉は *demean* です。あるいは, *feel[think] something beneath one* という言い方もあります。It would be beneath me to do such a thing.とか, He would consider it beneath him to take money for something that he had done out of kindness.

(親切のつもりでやったことに対してお金をもらうのをいさぎよしとしない) というように使います。あるいは, これはちょっと意味が違いますが, *feel that it is not done to…* という表現もここで使えると思います。たとえば, In Japan it is not done to stick one's chopsticks upright in one's rice.とか, In England it is not done to make a noise when one drinks tea. というように, ‘社会的に〔習慣として〕…は許せない’ということになります。

★「気風」を名詞としてとらえると *characteristic* に相当すると思われますが, これに「昔からの」(ancient [longstanding])を付けて *an ancient characteristic* とすることも出来ます, その際には The Japanese have an ancient characteristic that…ではなく It is an ancient characteristic of the Japanese that…にした方が英語らしくなりますが, 元の日本語の表現より意味が強くなるように感じます。

★「気風が強い」は, ここでは「一般的に言って日本人の気持ちには…の傾向があった」と言うことですから, 難しい言葉を使わなくて *have tended to feel…* という表現で十分と思われます。「語るのをいさぎよしとしない気風が強い」は *have tended to feel it demeaning to talk…* くらいでいいのではないかと思います。

■一方, 欧米を始め世界多くの国では, 自己表現をきっちと, 魅力的に出来ることが, 紳士の必要条件とされている。(8311)

★「一方」ですが, この場合の「一方」ははっきりと二つのものを対照的に見ているわけですから *on the other hand* が一番いいと思います。なお, 「同時」を表す〔関係性指標〕の *while* も使うことができますが, その場合には前の文のピリオドをコンマに変えて続けることになります。

★「欧米を始め世界多くの国では」はそのまま訳すと *in many countries of the world including Europe and America* で, これでもいいですが, Europe にしても America にしても国名でないという点が引っかかります. *in the West and many other countries of the world* と言いかを変えても West が国名ではないので, *in the West and many other parts of the world* が最も矛盾しないということになります。

★「自己表現」は「自分の考えていること・感じていることを言葉や音楽や踊りやその他の方法で表現すること」ですが, 日本では *self-expression [to express oneself]* で対応出来ると思ってきたようです。しかし, 英語の *to express oneself* は‘自分の考えていることを言葉で表現する’という狭い意味使うのが普通です。たとえば, He is bad at expressing himself. とは「彼は口下手だ」ということです。どうも日本人は明治以来 *express oneself* を誤解してきたのではないかと思われます。たとえば, よく英語で Children must learn to express

themselves.と言いますが、極端に言うと、これは「言葉で自分の考えを表現する方法を学ぶ」という、あくまでもテクニックの問題を言っているのであって、内容は何でもいいのです。ですから、たとえば、I could not make myself understood in English.とは、言い換えると、I could not express myself in English.ということになります。ですから、express oneselfという表現には「自己を主張する」というニュアンスは入っていないません。元の日本文の「自己表現」には「自分の考え方・気持ちを表現する」という内容面が問題にされていると考えられるので present one's ideas [feelings] ぐらいにしないと意味が通じません。

★「きちっと」は neatly でもいいですが、ちょっと古めかし感じになります。succinctlyを使えばいいでしょう。

★「魅力的に」は(present one's ideas) attractively でいいでしょう。ただ express oneself attractively とすると「自分が魅力的に見えるようにする」という感じになります。その意味でも express oneself は避けた方がいいです。

★「紳士」は普通 gentleman と訳されます。gentleman は、時代によって、また前後の関係によってニュアンスが変わるので使い方が非常に難しい言葉で、ここで使って意味は通じますが、やはり、a man of culture とか a cultivated person とした方がいいでしょう。なお、cultivated の代わりに educated を使うと範囲が狭くなってしまいます。

### ● 「・・・出来ることが～の必要条件」の構文

「・・・出来ることが～の必要条件」は、It is a necessary condition for ~ to be able to…となりますが、構文的にちょっと紛らわしく「紳士が・・・が出来るためにはそれ(It)が必要である」ということになってしまいます。ですから、それを避けるためには To be able to...is a necessary condition for a gentleman.とせざるをえないのですが、それでも「紳士にとって何かするための必要な条件」ということになってしまいます。辞書には「必要条件」というと necessary condition となっていますが、こういう場合には condition ではなく qualification という言葉を使えばよく、それから necessary ではなく essential の方がいいでしょう。

★「・・・とされている」は普通、is considered とか is seen as で対応することができます。ここでも使えます。

### ■国家の場合にもこれが当てはまる。(8311)

★「国家の場合」は national affairs とか the case of nations とかです。

★「にも」は too とか also です。

★「これが」は this でもいいですが、厳密に言うと this が具体的に何を指しているのかという問題があります。「これ(this)」が何を指しているか考えてみると、the fact that Japanese and people of other countries are different [think differently] where self expression is concerned ということです。つまり、上で述べた二つのことを「これが・・・」と言っている訳ですから this では英語としてちょっと不自然に感じられるのです。したがって、「これ」を「同様な違い」(the same difference)と言い換えると、英語としての不正確さを補うこと

が出来ると思います。

★「～に当てはまる」は hold true of とか apply です。なお, be true of でもいいですが, hold true of の方が「～の場合に当てはめてもそのまま通る」という感じが出ます。

■明治以来日本政府は「外交は耳だけ動かせばよろしい。口を動かす必要はない」(小村寿太郎)といったサムライ的身構え方で外国と接してきた。(8311)

★「明治以来」は(ever) since the Meiji era とか(ever) since the Meiji Restoration でしょう。なお、習慣として最近の本では、年号の場合は era を使い、たとえば徳川時代とか鎌倉時代というように年号と関係なしで続いている場合には period を使います。

★「日本政府」は the Japanese government です。

★「外交は」の「は」は「では・においては」ですから in diplomacy です。

★「耳だけ動かせばよろしい」は we should use our ears alone とか, it is enough to use our eras です。なお、「・・・しさえすればよい」には have only to …がありますが、ここで we have only to use our ears. とすると、口に対して耳を強調しているのではなく、単に「ただ耳を動かしていさえすればいい（それ以外は何もすることはない）」という意味になってしまいます。

★「口を動かす必要はない」は It is not necessary to open our mouths でも通じますが、It is not necessary to use our tongues の方が英語的です。

### ● 情報の比重

「外交は耳だけ動かせばよろしい。口を動かす必要はない」は表層的にはどちらも同じ比重ですが、日本語の勢いまで含めて翻訳すると、In diplomacy, it is enough to use our ears; to use our tongues is unnecessary. と訳したくなります。

### ● 「『・・・』(小村寿太郎) の処理

英語らしくするには「(小村寿太郎)」を日本語のようにカッコで括らないで、前の「・・・」の発言者として文章の一部に入れることです。つまり、「『・・・』と言った小村寿太郎・・・」です。すると、ここは「連体修飾節(『・・・』と言った) + 特定体言(小村寿太郎)」になりますから、英語では「特定名詞(Komura Jutaro) + 「コンマ + 関係詞節(, who said, “….”)」とすることになります。

★「サムライ的身構え方」は samurai-like attitude とか the samurai-style approach です。

★「外国」は foreign countries ですが、other countries くらいでいいと思います。

★「～と接してきた」は has dealt with ~でいいでしょう。継続性を強調したいなら has been dealing でしょう。なお、「接してきた」は negotiate を使うほど強くないと思います。

### ● 「『・・・』(小村寿太郎) といったサムライ的身構え方で」の処理

「(小村寿太郎) といった」の「といった」は「と言った」のではなく「というような」という意味で使われていると思います。したがって、「というような」の処理の仕方によつていろいろな組み合わせが考えられます。